

三日後にソ連軍が上陸してくるとも知らずに、占守島における戦闘はあまり知られていない。

八月十八日午前二時三十分、占守島黒端岬に突如ソ連軍が上陸を開始した。方面軍司令官は、「断固速滅せよ。命令を発した。日ソ合わせて三万五千の大軍が入り乱れての大激戦となった。完膚なきまでにソ連軍をたたきつけた。両軍から軍使が出た。日本軍からは柳岡参謀（抑留中死じ）、交渉は決裂して、再び戦闘が再開された。大本営からは、戦闘を中止して武装解除に応じよ。ひっきりなしの電報である。ソ連軍の捕虜となってたまるか。戦闘を続行すべしと引きむ将兵もいたが、日本は負けたんだ。島の攻防戦は大詔がおりて、七日目をもって終わりを告げた。

抑留地マガダンへ

武装解除が終われば、一切ソ連の命令どおり、一か月余りの戦場整理が済むと、「東京タモイ」とだまされながら、四千人の将兵がソ連製貨物船に詰め込まれた。十月二、三日と記憶するが、着いたところが沿海州。北緯六十度マガダンという流刑の町であった。満四年間の抑留

生活中にわかったことだが、マガダン以外の地に住むソ連人は、マガダンという言葉をできるだけ口にしないことにしている。相手はマガダンと聞いただけで、顔が青ざめ、ふるえ上がるからである。銃剣を突きつけられながら、流刑の町マガダンの岸壁に上陸した四千人の労苦は、ここから始まった。北極圏に通じる通路工事、伐採作業（二十四年九月まで作業隊長）に従事。みずから手で揚陸作業を終えた船に乗って、ナホトカへ向かった。

## シベリアに生きる

北海道 川 友勝

### 第七収容所

昭和二十年十一月二日タイセットより五十二キロ囚人の村キビトックに下車。我々五千人は駅より約八キロ白がいがいの雪路を警戒兵にどやされながらトボトボ歩いた。だまされた無念さと、いつ帰国できるかわからない

失望のため、無気力集団と化していた。收容所は周囲に有刺鉄線が張り巡らされ、四隅に望楼が立ち、木造平家のバラックが大八棟、小五棟、実に網走番外地である。

明治の初期に北海道開拓のため、奴隷のごとく酷使したタコ部屋もかくやと思わせるところであった。第七收容所は山の上と山の下に分かれており、山の下に私たち二個大隊（二千人）がはいった。直ちに人員検査、軍隊の習慣で四列縦隊に整列したが、警戒兵は何回数えても総員がわからない。仕方がないので五列にならんで、やっと終了。まきとり、糧秣運搬、水汲み以外の作業のなかったのは次の日一日だけ。三日目からは伐採、道路建設、道路盤づくり、丸太おろし、集積、運搬等の強制労働が始まった。日曜とメーデー、革命記念日、年末年始三日間だけ休み。一日八時間、ノルマとのたたかいであった。主な作業はバム鉄道（ウスチークートからアムール河畔コムソモリスクに至るシベリヤ第二鉄道）の建設であった。

二週間以上の不衛生な貨車輸送、着たきり雀の被服、シラミが猛発生、つぶしてもつぶしても減らない。入ソ

一か月もたらずに発疹チフスが蔓延し、死ぬ者ができた。あわてたソ連は入浴の都度デスカメラ、熱気消毒（半地下の建物にペーチカをたき、高温の中に被服をつり下げシラミを退治する）、さらにわきの下などの毛を剃る等少しでもシラミの発生源を除去しようとした。入浴もまた哀れ、おけに二杯の湯しかない。一杯の湯で二センチ角の石けんで身体を洗い、あと一杯の湯をかぶって終わり。熱気消毒を終わった温かい被服がなかったら風を引く。もちろんこのくらしいことでシラミ、発疹チフスが絶滅するわけがなく、赤痢、結核、栄養失調患者がどんどん増えて二年目を迎えるまでに半数の者が発病、千人くらいが死んだのである。ついに私たちの收容所は病院となり、比較的死亡者の少なかった私たちの大隊が病院つき作業大隊となり、名もタイセツト地区第七病院と呼ばれた。

毎日十人、二十人と死ぬ。遺体は衛兵所のわきの靈安室の土間にシート一枚をかぶせて並べ、将校が交代で通夜をする。廃油で灯りを取り、松葉をくぶらせて線香がわりにし、パン粉を練って団子をつくり、供えただけの

通夜。酷寒のシベリヤ、花等あるわけがない。終わって真夜中の埋葬。NHKの放送で、ハバロフスク、イルクーツク等の日本人墓地が紹介されていたが、私の知っている限りキビトークの山の上に二千人くらいの遺体が埋まっているはずであるが、そこには墓らしいものはないと思う。毎晩日本の食べ物の夢といつ帰れるかの話をしながら死んでいった人たちの怨念は、いつ晴らされるのだろうか。

零下三十五度以下に下がった酷寒時、スコップだけで凍土を掘るのは大変な作業だった。一人々々の墓穴等も思ってもよらない。たき火をして凍土を解かし、幅三センチ深さ二十センチの側溝のようなものを長く堀り、遺体を一列に並べ、その上に堀り上げた凍土をかぶせるだけで精いっぱいでした。翌春五月、表土が解けたころ、遺体埋め直しの作業をしたのであるが、もちろんだが、どこに埋められているかわかるわけがない。当初大隊本部で死者名簿を作成していたが、政治部長に取り上げられた。

やむなく道、県人会を開いて出身地別に死亡者名を覚

えてもらったが、これも二回やっただけで不法集会と見なされ、収容所長から解散させられたのでした。二年目の五月以降になって一部の将校が他の収容所に移された。そのたびに少しずつ兵も出され、八月ころまでには四分の一くらいとなり、私が転出した十一月ころには、衛生兵を含め、五十人くらいになり、本格的な病院と

#### 重倉倉

私が行ったところは、ザガタイヤ二十二分所で、オーカー（身体の弱い級）の大隊のほか、別棟に特殊大隊があつて、私はその大隊長になった。そこには洋服屋、靴屋、家具職人、板金工等の技術者があつて、通常は丸太集積、積みおろし、道路建設等の労働をするのであるが、時折収容所長が、服の布地、靴や家具の材料等を持って来て、軍服、長靴、洋服タンスや鍋等をつくらせていたのである。この大部分は上への貢ぎ物になっていくらしい。共産主義の国家でもその下が通用するらしい。そのゆえもあつて衛生兵もいなくて、すべて日本人の自主管理に委ねられて、久しぶりに別天地の感じがし

た。しかし、ここにも厄介な問題が待ち構えていた。衛生巡視と称してソ連の軍医中佐が毎日のようにやって来る。独ソ戦で捕虜になり、格下げとなり、シベリアの日本軍捕虜の管理に回された人である。(政治部員を除き他のソ連将校は全部例外なしにその類であった。)軍医は来るたびに服や靴、家具等の修理物を持ってきて頼んでいく。本来收容所長の証明がなければ、やってはいけないのである。

そのうちに洋服等の新調を強制しだした。材料がはいり次第、つくるからとごま化して一日延ばしにしていたが、さすがにしびれを切らして怒り出した。あそこが汚い、ここが不潔である。大隊長の衛生管理は劣悪と並べ立てる。ついに二月(入ソ三年目)の寒い日、炊事場が汚い、炊事の作業員の手が不潔である、と私を呼びつけ、散々怒鳴りまくったあげく、反ソ行動をとったとして重営倉五日の処分となった。軍歴六年、入隊以来一度も営倉の味を知らない私がシベリヤに来て重営倉。衛兵所の一隅に雑居房があり、ここは一般の営倉で、衛兵所のペーチカの暖かみを通る。

重営倉は衛兵所から廊下に出てその奥にある個室である。三畳間くらいの室に明かり取りの小窓が一つ。板張り、布団なしの寝台があるだけ。窓ガラスは割れ、寒風吹きすさび、戸外と同じ温度である。覚悟していたので、ありったけの防寒衣服を着こみ毛布を一枚持って行ったのであるが、寝る段になって毛布を敷き身体に巻きつけ防寒外套をかぶって寝ようとしても寝れるわけがない。零下三十五度以下に下がっている中では、一時間もすると、寒さを通り越してこのまま凍死するのではないかと幻覚症状が生じる。私の場合、小便をするからと出してもらい、衛兵所のペーチカに一時間くらい暖を取り、便所に行つて帰つて来てからまた一時間、衛兵は事情を薄々知っているから万事大目に見てくれる。こんなことを三回も繰り返しているうちに朝がくる。六時になるとカーン、カーンとつり下げの半鐘がなった。作業待機だ。零下三十五度以下になると作業待機である。十一時ころになって二十度台まで気温上昇すると作業に出される。ノルマが八時間も五時間も同じだから兵の多くは喜ばない。

私の宮倉は三晩で終わったが、毎朝レールの半鐘がなった。重宮倉はパンと水だけ。一般食と一日おきである。しかし私の場合毎日一般食の差し入れがあり、しかも毎日毛布一枚ずつ持ってきてくれた。シベリアで人の情けを改めて知った。

#### 糧秣車強盗事件

宮倉から出されて大隊長は首。六十六キロ地点の中央修理工場大隊副官として移された。ここでは糧秣車強盗事件に遭遇することになる。

旋盤工が操作を誤って頭部裂傷を負った。患者護送のため、熊谷衛生兵（岩手県）と二人で第七病院まで行ったその帰りの出来事。病院付大隊長となっていた川守田大尉（青森県）と再開を喜び夕食を御馳走になり、映画を見せてもらったの帰り、夜も更けていた。キビトーク引込線に入っていた病院専用の糧秣貨車の蔭から三人のソ連人が飛びだし、我々のトラックが乗っ取られたのである。はじめから警戒兵、トラックの運転手、なれ合い劇だったのである。そこに巻きこまれた私たち二人が悲劇だったわけ。小麦粉、肉、魚、野菜、バター等を小型

トラックに積み込み発車、着いたところはキビトーク村の一軒の家、私たちもここでおろされた。

収容所までは十六キロくらいの距離だから徒歩でもしているのだが、深夜、警戒兵なしではかえって危ない。隣の部屋では戦利品を山分け、ウオッカで乾杯しているのをジリジリ聞きながら、与えられたパンをかじりマンジリともせずに一夜を明かしてしまった。警戒兵は患者の手術に手間取り、様子を見ているうちに朝になったという。

この野郎どうしてくれようか、入院患者の糧秣を横取りされたわけだから腹が立ってしょうがない。ところが朝いざ出発ということになって車が動かない。バッテリーがあがってしまったらしい。青くなった警戒兵は運転手を怒りあげたが後の祭り、十六キロの道を歩いて帰った。ここで私の腹は決まった。所長から聞かれるまま昨夜のてんまつ、一部始終を洗いざらいぶちまけた。所長は私の言うことを信用し、早速キビトーク村の例の一軒を探し出し糧秣や車を見つけ、一味は一網打尽、刑務所行きで一件落着。もちろん私たちはおとがめなし。

このあたりはソ連人氣質の面白い一面であるが、糧秣の横流し、横領、強奪等日常茶飯事で、そのたびに我々の口に入る量が減っていったものと思われる。

### 入院、足切断手術

六十八キロ工場に半年くらいで百六キロ地点に移された。医務室にいた古庄軍医（熊本県）と熊谷衛生兵と一緒にである。入ソして三年目の秋、今年も帰れないと百六キロ収容所の空気は沈みきって暗かった。ここでまた大隊副官の仕事をしていた二か月目にはいったころ、終戦時の受傷箇所が悪化して来た。古庄軍医の勧めもあって入院加療のこととなった。入ソ以来の部下等から離され一人ぼっちの身。入院先は縁あって第七病院だった。顔なじみのノッポの病院長（ソ連軍の中佐）の診断で、血栓性静脈炎の病名、切断しなければ治らない。しかし手術に当たって、輸血もできないし手術室の施設が悪い。栄養失調の身、手術に耐えられるか疑問である。まず体力の回復が先決とばかり、赤外線照射と痛みどめの注射等で気休め治療しながら帰国の機会を待つということになった。しかしどういいうわけか帰国については政治部員

から許可がおりない。入院後一か月もしたころには痛みやはれもなくなくなって歩行もできるようになってきた。この分ならと喜んで入ソ四年目の新年を迎えた二月のある日、深夜突如右下腿足先が冷たくなって目が覚めた。一生懸命マッサージを繰り返しているうちにようやく温かみが出たとたん、今度は猛烈に痛み出した。栄養失調のため循環器系統がやられたのである。末梢血管が詰まり血液が通わなくなってしまう。そこから肉体組織の破壊が始まった。脱疽症状である。え死、炎症を起こしている患部のところに血液が循環してゆくのだから、トンと脈の打つ速さで激痛を感じるのである。寝られるわけがない。一番おそれていたこととなった。足の甲部は真赤にはれて、さらに末端は黒くなっていく。最初は睡眠薬で二、三時間は寝れたが、量を増やしても効かなくなる。

四月に入って一睡もできなくなった。このとき同郷の小樽出身の新岡猛さん（昨年死去）が入院してきて、夜中になると一時間くらい足をさすりに来てくれた。マッサージをしてみると気もまぎれ疲れも加わってウトウトで

きたのであった。

このころになって悲観的な感情が支配し、死ぬことを考え出した。この体で手術に耐えられるか、万一運よく手術が成功して帰っても隻脚の身、到底敗戦国の中、激しい生存競争に打ち勝って行く自信がない。それならば、ここで一思いにと、死ぬ方法をあれこれ考え、結局手っ取り早い睡眠薬自殺の覚悟を決めた。

毎日もうらう睡眠薬を二十四服貯め、一挙に飲んだものである。幸いにして発見が早く、胃洗浄の手当てでも有効で、心臓が人並み以上に丈夫だったことも手伝い、助かったのである。

人間は少なくとも常人である以上簡単に自殺できるものではない。自殺者は精神異常者である。私も長期間睡眠不足が続いてももうろうとしていたから自殺する気になつたと思う。つきが落ちた私はそれから生き抜く自信ができたものである。五月のメーデーが終わって間もなく手術が行われた。板張りの手術室、土足の医者、病院長と高島軍医（鳥取県）、看護婦二人（何れもソ連人）、手術室にはいる一時間前にモヒを二本打ってくれたが、

全然効かない。手術は高島軍医が主になってやってくれ、三時間くらいかかったと思う。局部麻酔、輸血なしだから高島先生は止血に苦労したと思う。鋸で足の骨を切る音を他人事のように聞き、神経を切るときの脳髄にズキンと痛みが走ったこと以外、さして苦痛は感じず手術は無事完了。術後の処置は滅菌食塩水だけで、化膿どめなしだったので患部は二日目から化膿し始め、熱も三十八度を超え、食事も全部吐いてしまい危険だったが、何とか乗り越えて、一か月半くらいで完治してしまった。帰国したのはそれから一年以上もたった入ソ五年目の八月二日高砂丸でした。術後二回も帰国名簿に乗せられたが、その都度政治部員の検査でハネられたのでした。

## 拉古での収容所生活

新潟県 村山家司

拉古での収容所生活